

はじめに

アリストテレスは、時間を「運動の数」と定義したが、数えられたものとしての時間は、主として量的な時間である。それに対して、過去、現在、未来という時間様相については、まだ納得できる定義がない。アウグスティヌスやフッサールなど、伝統的時間論では、時間様相は、想起や予期という「心の働き」をもとに定義された。これは大筋として正しい方向であると思われる。というのは、「心の働き」もまた広い意味での「運動」であり、アリストテレスが立てた「時間は運動の何なのか？」という問いの延長にあるからである。時間はあくまで、「運動」との相関において捉えなければならない。この発表では、それをさらに限定して、「時間様相は運動の何なのか？」という問いを立ててみたい。そして、時間様相に関わる「運動」として、「心の働き」を考えるのであるが、その際の「心」を自然主義的に捉えることにしたい。というのは、アリストテレスの時間の定義は「自然学的」であるのに対して、アウグスティヌスやフッサールの「心」や「意識」は非自然学的であり、両者の懸隔は非常に大きいので、この懸隔を埋める努力をしたいからである。

では、「心」を自然主義的に捉えるとは、どのようなことだろうか。時間様相という観点から心の働きを考えると、知覚、想起、予期はどれも重要であるが、しかし、知覚、想起、予期というものを自明の前提にしたのでは、分析はあまり深まらない。なぜなら、そこで問われているのは、そもそも知覚、想起、予期とは、心に何が起きることなのかということだからである。つまり、知覚、想起、予期それ自体を、さらに掘り下げてみる必要があるのである。この発表では、一つの試みとして、感覚それ自体の記号的・表象的・志向的なあり方という観点を取ってみたい。歴史的にみると、カントは、自然の作用として外部から触発される感覚と、それを認識にまとめあげる意識（＝統覚）の作用とを、対立的なものとして切断した。この立場からは、記号的・表象的・志向的な作用は意識の働きに基づいて成立するものと考えられ、自然そのものに内在するものではないことになる。20世紀の現象学も基本的にはこの線を継承しており、自然と意識とを対立的に捉えている。しかしこれは、可能な唯一の構図というわけではなく、たとえばライブニッツには感覚から理性までを連続的に捉える視点があり、モノドロジーは一種の自然＝記号論とみなすこともできる。またバークリの『視覚新論』によれば、視覚はそれ自体が記号であり、視覚観念は触覚観念を「示唆する」という記号的・表象的・志向的な在り方をしている。

このように、感覚や知覚がその原初的なあり方においてすでに記号的・表象的・志向的なものであるならば、過去・現在・未来といった時間様相はどのように捉えられるだろうか？ 20世紀においても、感覚や知覚の記号的性格を重視するものとして、フロイト、ギブソン、ルース・ミリカンなど、興味深い考察が提出されている。この発表では、一つの手がかりとして、ミリカンの諸説を検討することによって、時間様相がそこから生成する「心の働き」を考えてみたい。

1 ミリカンの自然記号論 —— 自然そのものの中で「表象」が生まれる

アメリカの自然主義の哲学者ルース・ミリカンは、1984年に、*Language, Thought, and Other Biological Categories*を刊行し、生物が自らの存続を可能にする固有機能をどのように発展させてきたかという進化論的視点から、人間の心や言語をも理解しようとする野心的な試みを行った。彼女の主著と目される本書は、しかし非常に難解で、分野の異なる研究者が簡単に利用できるようなものではない。幸い、2002年にフランスで行われた講義をもとにした2004年の著作、*Varieties of Meaning*が2007年に信原幸弘氏の手によって邦訳されたので、ミリカンの哲学の全体像を見ることが容易になった⁽¹⁾。その中から、時間様相に関係する心の働きを理解するために有益な考察を抜き出してみたい(以下、援用箇所は、訳書頁のみを挙げる)。

ミリカンは、バクテリアから人間の意識にいたる進化の過程を、「表象 representations」という一貫した構図で連続的に捉えようという、実に雄大な構想を提示する。我々は、人間の言語をモデルに「記号」を考えがちであるが、ミリカンは原始的な生物もまた記号を用いて生命活動を営んでいると考える。たとえば、(これは最初にアメリカの哲学者ドレツキが使用した例だが、)ある種のバクテリアは酸素の多い海水が苦手なので、細胞内の磁石が示す N 極の方向へ動くことによって、酸素の少ない深い海に移動できる(p61)。通常理解では、このような原始的生物の営みは、自然の因果関係とみなされがちであるが、実はここには、原始の「表象」や「記号」が息づいている。なぜなら、磁石の N 極の方向と、酸素の少ない海水は因果関係で繋がっているわけではないので、この磁石は、酸素の少ない海水のありかを「表象する(表現する、指示する)」原始的な記号なのである。さらに言えば、このバクテリアの内部にはすでに、表象の送り手(=磁石の N 極)と表象の受け手(=その方向にバクテリアを動かす機構)という、二極の分枝が生じている。送り手と受け手という二極があることが、記号が、「志向的表象」であるための条件であるが、バクテリアの磁石の N 極は、この意味ですでに「志向的表象」なのである。

その理由は、「志向的表象とは、表象の送り手と表象の受け手という二つの要素がともに「相互利益」を受けるところに成立するものであり、そのような二つの要素があつて初めて、「表象(表現)する」という関係が意味あるものになるからである。人間の言語の場合でも、語り手と聞き手がいるわけであり、両者の利益になるからこそ、そもそも言語なるものが存在すると考えられる。バクテリアの場合で言えば、体内磁石の N 極が「指示する」「表象する」ものは、少なくとも四つある。すなわち、(1)他の無数の磁石も指示する方向(=北)、(2)地球の地磁気が指示する方向(=北)、(3)深い海、(4)少ない酸素の在りか。だから、バクテリアの体内磁石の N 極が「表象する」のは、この四つのいずれか、あるいはすべてでもよいはずであるが、そうはなっていない。(4)の少ない酸素の在りかのみが、体内磁石の N 極が「表象する」ものなのである。なぜかといえば、少ない酸素だけが、バクテリアの生き残りに関わる要素、すなわちバクテリアの「関心の対象」だからである(p110)。たまたま体内磁石の N 極の方向を感知して、その方向へ移動するバクテリアは、そうでないバクテリアより生き残る確率が高い。つまり、N 極を指示する表象の送り手も、それに従って酸素の少ない海に移動する機構(表象の受け手)も、ともに生き残ることによって「相互利益」を得たわけである。それに対して、逆の行動をする表象の受け手、つまり磁石の N 極を感知すると、逆に酸素の”多い”海の方に移動する機構は、滅びてしまったために、相互利益を受けることができなかった。だから、結果として、磁石の N 極が、少ない酸素の在りかを「表象する」場合だけが生き残り、そのような表象関係が誕生したのである。以上が、バクテリアにおいて原始の表象が生成する場面である。それは、我々が「意味」や「目的」と呼んでいるようなものの原始の生成の場面でもある。

さて、このような表象の送り手と受け手の双方が相互利益を得る「志向的表象」のさらに根底には、ある要素と他の要素の間に一対一対応が成り立つという関係、すなわち、表象や記号が成立するためのもっとも基本的な関係が存在する。ミリカンはそれを、「局地的反復的自然記号 local recurrent natural signs」と呼ぶ。実際には、表象や記号は、生命活動が存在し、表象の送り手と受け手がともに相互利益を得る「志向的表象」というあり方で存在するのだが、生命なき無機的な自然の中にも、天体や地形の関係、数学的關係のように、要素と要素の対応関係はいくらでも存在する。そのような対応関係をいわば利用することによって「志向的表象」は成り立つのだが、その利用される内実が、「局地的反復的自然記号」なのである。

「局地的反復的自然記号」の例として、ミリカンは次のように述べる。「コネティカット州では、ガンが 2003 年 11 月 25 日に南に飛んでいるということは、2003 年 11 月 25 日のすぐ後にコネティカットに冬がやってくるということの自然的記号である。」(p64) この例のもつ含意を検討してみよう。ある同じ場所において、ガンが南に飛んだ時刻と、冬の到来の時刻という、二つの時刻の関係が、毎年毎年反復するから、二つの時刻の間には規則的關係があり、前者は後者を「表象する」記号になる。まずここには、前者が後者を引き起こすという因果関係がない。あるのはたんなる規則的対応関係である。因果関係があるところには、もちろん規則的対応関係があるが、しかし対応関係は、因果関係がなくても存在するずっと広範な関係である。

生命活動が、この広範に存在する自然の対応関係を「利用する」ところに、因果関係とは区別される表象(表現)関係、志向的關係、意味的關係という因果的でない新しい関係が生まれる。記号や言語は、このようにして成立する。

さて、このコネティカットのガンの例は、たくさんの含意をもっている。コネティカットという「同じ場所」に私が何年も住み続けるのでなければ、毎年の反復関係を表象(記号)として利用することはできない。同じ場所に住み続けることが、自然の諸要素の間に「反復」を発見できる条件であり、これは反復という時間的規定は、実は同一の空間を前提しているという、時間と空間に関する重要な規定である。その反対の例として、たとえば、生まれてから死ぬまでの間、毎日移動を続け、けっして同じ場所に戻らない生活をしている人間を考えてみよう。彼にとって、すべての光景は、自分の運動と反対に流れていくから、時間だけでなく空間もたえず流れている。そこでは、現れるものすべてが新しく、反復するということがない。つまりそこには「局地的反復的自然記号」は存在しえないから、彼にとっては「表象」関係が成立しない。

私が同じ場所に住み続けることは、「個性」の基礎でもある。ガンが通るコネティカットの空の「あの場所」はまた、周囲の山々や野原、川、畑、道路、家並みなどの全体の光景の中にはめ込まれた「あの場所」である。これら私の周囲のすべてのものは、私の身体にある「ここ」を中心とするパースペクティブに配置されている。パースペクティブに配置されたすべてのものは、他のものとの空間的な対応関係によって、自分の位置を記号的に表象する。たとえば、向こうの大きな家は手前の小さな家に半分隠されているから、小さな家よりも遠くにあるとか、この車は今ここから見ているからこう見えるが、向こう側に回ればああ見えるなど。それぞれの物体が、みずから記号的に語っている。ライブニッツのモナドにおいては、自分の身体を中心とするパースペクティブによって、世界の諸事物はすべて相互に「表現」されたが、彼が「都市の光景」について述べたように、このような光景が自らを表現するのは、自分が都市を「歩き回る」からである。私が同じ場所に住み続けることは、一定の空間の内部を「動き回る」ことであり、それによって、さまざまな同じ事物が繰り返し私に現れるから、この繰り返し現れる反復的規則性によって、たとえば物体Aは物体Bとの空間関係を「表象(表現)する」という記号になる。つまり、自分が同じ空間の中を動き回らなければ、反復は起こらないのである。

コネティカットの空のガンが冬の到来を告げる記号になるための反復は、コネティカットという親しい場所(J.J.ギブソンの言う「環境」)に、私が住み続けているからこそ可能なものであった。そして、私がそこに住み続けることは、私がそこ動き回ることであり、それによって諸物体が反復して現われ、私に見えるすべての物体が直ちに互いの位置関係を表象(表現)する記号になった。ここで重要なことは、表象(記号)の成立の条件である反復には、同一の空間(環境あるいは大地)と、そこに住む「私」が必要なことである。どのような反復も、私に開かれた、世界に一つしかないこのパースペクティブの中で行われ、どのような表象(表現)も、私に開かれたこのパースペクティブにもとづいて何かを、表象し、志向し、意味する。つまり、表象は、その根源からして、「この私」という時空的パースペクティブをもつ個性と一体のものとして存在する。

ここで、「個性」という概念を、二つに区別しなければならない。一つは、通常の個性である。私の生きる環境内で、さまざまな事物は、種と個体の相で私に理解される。教室の机は、どれも同じ形をしているという点で、同じ種類の机であるが、しかし私が今座っている「この机」は、別の「あの机」とは別の個性を持つというように。しかし、こうした one of them としての反復によって与えられる個性は、そもそもそのような反復は、「この私」のパースペクティブにおいて初めて可能になるという意味で、「この私」が開く根源的な個性性に依存している。そして、「この私」のパースペクティブが根源的である理由は、そこでは記号となる光景のそれぞれの項が、すべてそのパースペクティブの中の「その位置」にはめ込まれている、つまり記号(表象)それ自身が、つねに時空的な一定の位置に置かれていることこそが、原始の記号の特徴だからである⁽²⁾。

原始の記号は、それ自身が時空的な当の場所に嵌め込まれている。これは、我々の言語と大いに違うように思われるだろう。というのも、我々の言語は、言葉それ自身が置かれている時空的位置とは無関係に意味をもつからである。言語は語り手や発話の時空的位置を問わない汎用性があり、誰が、いつ、どこで使おうとも、一定の文法に適った文章は一定の意味をもつのが言語である。にもかかわらず、我々の言語にも「これ」「それ」「ここ」「あそこ」「今」「私」「あなた」のように、発話そのもの時空的位置から切り離せない言葉が存在し、しかもこれらの言葉は我々のコミュニケーションに不可欠である。ミリカンは、これらの「奇跡のような」不思議な言葉について、次のように述べている。「こうした指標的形式の直接の先行者はもっとも原始的な記号に属するものであり、我々はこの原始的な記号からそれほど遠く離れてはいない。」(p207) つまり、原始の記号は、我々の言語の不可欠の一部でもあるのである。

2 時間と空間の分離 —— 複数のアフォーダンスによる時間順序と、線形時間

表象(記号)は、自然の中にありながら、自然の因果性とは異なる関係をその本質とする。たとえば、鳥が森の中を歩くと土に足跡を付ける(p43)。この鳥の足跡は、鳥の存在を表象する記号である。しかしここで、鳥が土を踏むという因果的作用が、この足跡を記号にしているのだと考えてはならない。この因果作用はたしかに存在する。しかし、それは記号を物質的に作り出す過程の話であり、記号が記号であることの根拠とは別の話である。鳥の足跡が鳥の記号である理由は、鳥の足跡が見つかった後、猟師やバードウォッチャーは、その周辺で鳥そのものに出会うことが繰り返されるからである。ガンの飛来と冬の到来との関係が反復されるのと同様に、鳥の足跡の発見と鳥との出会いとの関係が反復されるからこそ、前者は後者の記号になる。この反復が記号であるのは、前者と後者をともに知覚する「私」にとってである。「私」は冬の到来に利害関心をもつ農夫であったり、鳥の存在に利害関心をもつ猟師やバードウォッチャーであったりする。つまり、足跡やガンの飛来といった記号は、それを読み取る者にとって何らかの意味で利益をもたらすからこそ、(志向的)記号なのである。この利害関心が「局地的反復的自然記号」を「意味」や「目的」といったあり方に結びつけるのである。

しかしながら、このように表象(記号)の受け取り手に利益をもたらす自然記号は、環境に時空的に埋め込まれている。生物は、このような自然記号を用いて、どのような認知と行動ができるのだろうか。まずは人間ではなく、動物の認知と行動を考えてみよう。J.J.ギブソンは、動物の知覚は、その動物の適切な行動を導くように最初から形成されており、それを「アフォーダンス」と呼んだ。ミリカンもギブソンを継承する。そして、そのような知覚はそれ自身が自然記号であり、それを読み取る者に利益をもたらすという表象機能をもつことが、動物の認知と行動を支配する基本線なのである。つまりここでは、環境の認知が、即、行動を導くのである。哲学では、「事実から規範は導出できない」という難問が語られる。しかし、アフォーダンスという見地からみるならば、事実を表象することと行動の指令とは一体のものである。環境の認知は、感覚器官の形成の段階からして、生存の必要に合うように形成されたのであり、存在と当為はもともと分かれていない。人間のように特別な進化をとげた動物だけが、事実認識と行動指令を分離する。だから、両者をいかにして繋げるかという問いは、転倒した問いなのである。むしろ我々は、生物の認知能力の進化の結果、どうして人間において両者が分離したのかと問うべきなのである。そして、事実認識と行動指令の未分化という視点にいったん戻ることによって、時間や空間の問題は、かえってよく見えてくるのである。

動物においては、事実の表象と行動の指令は一体のもので分離していない。ネズミを見た猫は、考え込んだりせず、直ちに捕獲の体勢を取る。興味深いことに、このような環境アフォーダンス知覚においては、空間と時間は一体になっている。つまり、動物においては、空間と時間が区別されていないのである。まず、この点から考えてみよう。ミリカンは、「目標の表象」と「目標達成の表象」とを区別する(p263f.)。両者は似ているようだが、実は違う。動物はもちろん目標の表象を持つ。たとえば、猫に見つかったネズミは、猫の目標である。しかし猫は、眼前に見える生きたネズミ(=目標)の他に、自分に捕獲されて死んだネズミの表象(=目標達成の表象)をもつ必要はない。なぜなら、眼前に見えているネズミに飛びかかるだけで目標は達

成されるからであり、空間的な「あそこ」に見えるネズミは、猫に捕獲されるべき「未来」のネズミだが、それは、猫の「ここ」から地続きに存在し、環境アフォーダンス空間の中にその「未来」がすでに取り込まれているからである。つまり、事実の表象と行動の指令が分離していない猫にとって、「今、見えている空間」の中に「未来」は書き込まれており、「今、見えている、あそこ」は、一瞬後の自分の位置という意味で「未来」なのである。これは、人間において、「今」とは背反する未来、現在と区別される本来の時間様相としての未来ではない。

だが、空間の「あそこ」が時間的な「未来」であることは、猫だけでなく人間の場合にもいくらでもある。自分が動いているときは、人間においても、時間と空間が分離しない環境アフォーダンスが立ち現れる。駅に向かう道を急いでいる時、行く手に現れた駅のホームは、あと 40 秒後に自分がそこから電車に乗り込む当の場所である。ミリカンを引用しよう。「テニス選手は[今の]知覚に導かれて、やってくるボールを相手のコート上の位置[=ボールの未来の場所]に打ち込むことができる。」(p277)「[人間は]近づいてくるボールを一撃をかわしたり、・・・[自動車で]走っているときに前方に迫ってくる急な曲がり角を曲がるための準備をしたり、つまり、時間的に遠位にあるものの知覚は、空間的に遠位にあるものの知覚とまったく同じように機能する。動物は、<そこ>にあるものの知覚によって<ここ>で導かれるように、<のち>に起こるものの知覚によって<いま>導かれるのである。」(p263)

このように、身体を動かして行動するときは、人間においても時間が空間に張り付いて一体化しているが、動物の基本的なあり方は、こうした時間と空間の一体化であるとミリカンは考える。動物といえども、複数のプロセスの前後関係という意味での時間系列の認知はある。ただし、このような時間系列は空間と重なっているところに特徴があり、「今、見えている」環境アフォーダンスの外部に「未来」や「過去」があるという本来の時間様相ではないのである。ミリカンは、動物にとっての時間系列は、空間的に異なる場所を循環するようなものだろうと言う。「[動物の時間は]、時間的に系列化された集まりとして表象されるにすぎない時間である。このように理解される時間では、時間はまったく空間と類似的なものになる。空間は、我々がその中をどれほどあちこち移動し回っても、ほとんど同じであり続ける。我々は空間のある部分から出発して、次々と隣の部分に進んでゆき、のちに再び同じ部分、出発したときと同じままであることがわかるような同じ部分に戻ることができる。」(p316) このように「循環する時間」は、四季の巡りに似ているだろう。人間も、「また春がやってきたな」と、春夏秋冬の同じものの繰り返しを感じる。おそらく百万年も前のヒトにとっては、循環する時間の意識が大きかったかもしれない。だが、同じ四季の繰り返しを通じて、ヒトは、祖父母、父母、私、子供、孫という「異なる個体の不可逆な順序系列」を経験するから、そこには線形時間の意識が生じたはずである。それに対して、動物の時間表象は、複数の時間系列にとどまり、前方にどこまでも伸びてゆく線形時間ではない。この線形時間こそが、時間を空間から引き剥がし、本物の時間様相を可能にし、「未来を変えること」や「新しいものの創造」を可能にするのである。

では、空間から時間の自立、すなわち、動物の循環する時間から、人間の線形時間への転換は、進化的にはどのように展望されるのだろうか。ミリカンは転換点として二つの契機を考える。

(1) 個別の知覚が個別の行動を指令するアフォーダンス空間を越える契機として、自分の「縄張り」全体を空間的な地図として表象できることが、個々の行動指令からは独立した「事実的表象」としての空間、つまり、空間としての空間が自立する契機。

(2) 一つのアフォーダンス空間ではなく、複数のアフォーダンス空間を経ないと目標が達成できない場合、まず A、次に B、そして C といった「移行の時間系列」が必要になる。アフォーダンス空間では、未来は目標として空間に嵌め込まれていたが、複数のアフォーダンス空間を「移行する」ことによって、初めて、空間から時間の契機が引き剥がされる。

まず(1)から見てみよう。多くの動物は自分の縄張りであれば、目隠ししてどこへ連れてこられようと、まっすぐ自分の住みかへ帰ることができる(p257)。またホシガラスは冬の到来に備えて食べ物を何百もの場所に

隠し、その隠し場所を覚えている(同)。アフォーダンス空間に生きる動物においては、空間の特定の場所に嵌め込まれた個別の目標としての自然記号が、ただちに個別の行動指令でもあるので、「一般的な」情報処理は必要ない。ところが、動物が持つ縄張り全体の表象は、特定の行動指令には結びつかないが、何らかの意味で汎用性のある一般目的用の表象(人間が持つのはこうした一般目的表象である)に一歩近づいている。また、ホシガラスの「記憶」は、個々の場所を、「多数うちの一つ」として捉えていると思われ、「これ」という個別性が、「多数のうちの一つとしての、これ」になること、つまり一般目的表象が自立することに記憶が関与していることを示唆している。

(2)は、ミリカン家にたまたま来たリスが、テラスの屋根から鎖で空中に吊るされた鳥用の餌箱を、何度も試行錯誤を重ねたあげく、ついに手に入れた過程を例としている。リスが生きているアフォーダンス空間は、森であり、樹木に駆け登って木の実を手に入れる行動は、認知と行動が分離しない型のものと思われる。しかし、テラスの屋根から吊るされた鳥用の餌箱は、地面や木の枝と不連続で「宙に浮いた」ものだから、リスの通常のアフォーダンス空間の行動によっては、アクセスできない「目標」である。リスは数日にわたって、餌箱の下、テラスの一方の側、テラスの他方の側など空間的位置を変えながら、餌箱の位置を観察し続けた。そして、通常の仕方では、飛びついても届かないにもかかわらず、さまざまな走り方を試みたあげく、一方の側から手すりに沿って走り込み、家のドアを反射板にして空間を高く飛び跳ねて、空中にある餌箱に前足を掛けることに成功。そのままずり上がって、餌を手に入れた(p281)。

このリスは、それまでのアフォーダンス空間にはない、新しい仕方で目標の表象を捉えている。木の枝ではない空中の餌は、従来のアフォーダンス空間に嵌め込まれた目標＝未来の表象のように、ただ一つの行動によっては、獲得できない。ミリカンによれば、このリスは、「食べ物が見えるところにあるという事態」→「食べ物が手の届く場所にあるという事態」→「食べ物が自分の手の中にあるという事態」という三つの段階の「移行という表象」を持つことができた。だからこそ、種類の違うアフォーダンスを組み合わせ、それまで通過したことのない「新しい経路」を作り出すことができた。これは人間の視点から見れば何でもないように思われるかもしれないが、認知と行動をアフォーダンス空間に縛り付けられている動物にとっては、きわめて大きな飛躍である。特に重要なことは、「食べ物が自分の手の中にあるという事態」という最終段階の表象、すなわち「目標が達成された状態の表象」を持つことである。そうでなければ、「移行」を表象することができない。この場合、リスにとって、空中にある餌の知覚(＝目標)がただちに行動指令に結びつかないという意味で、それは従来のアフォーダンス空間を越えた新しい事態である。リスは、行動に踏み出せず、逡巡する。普通のリスはそこで諦めるかもしれないが、そのリスは、「餌場が手の届くところにある」ことを確かめるという中間段階の表象によって、空中の餌という「目標表象」を、「餌を自分の手の中にある」という「目標達成状態の表象」へと移行させた。これは、最初の「目標表象」の空間の外部にある「目標達成状態の表象」によって導かれたのだから、「目標達成状態の表象」は、アフォーダンス空間に嵌め込まれた「あそこ」という「未来」ではなく、その外部にある本来の未来に近づいたのである。

3 空間の外部にある線形時間

以上をもとに、今度は、動物から人間へ視線を移してみよう。ミリカン家のリスと人間との間には、実はまだ大きなギャップがあるのだが、空間から時間が分離する方向性は、ある程度明らかになったと思われる。すなわち、アフォーダンス空間から時間が分離して、行動を指令しない中立的な空間と、空間の「外部」としての時間とに分かれるのが、人間の時間である。アフォーダンス空間では、時間は空間に嵌め込まれており、空間的「あそこ」が時間的「未来」や「過去」だったりする。空間に嵌め込まれた過去については、ミリカンは語っていないが、これから向かう「あそこ」が未来であるならば、さっき通り過ぎてきた後方の別の「あそこ」は過去である。つまり空間は、自分が向かう方向に開けているのが未来であり、自分の後方の空間は過去である。このように時間が空間に嵌め込まれている状態から抜け出て、時間が空間と「まったく重ならず」、別の次元のものになったものが、線形時間である。この線形時間の立場からすれば、どのように

広い空間が目の前に開けていたとしても、それはすべて「今」である。前方の「あそこ」が未来だったり、後方の別の「あそこ」が過去だったりほしくない。線形時間にとって、空間は時間軸に直角に交わるから、時間は決して空間の中に取り込まれることはない。これが、我々人間が理解する時間である。

このような「空間の外部にある時間」は、どのようにして成立したのか。ミリカンは、人間の言語が表象を「否定変形」することができることを強調する。否定判断の本性については、さまざまな議論があるが、ミリカンは、否定の本質を「反対の肯定的な、ただし不確定な主張をおこなうこと」(p311)に見ている。たとえば、「彼は背が高くない」「彼女は来ない」といった否定判断は、それで終わりなのではなく、「彼は背が中くらい、あるいは低い」「彼女は病気、急用ができた、約束を忘れた、わざと振った」などの肯定的事態のいずれかの可能性に我々の意識を向かわせる。ただちに行動指令に結びついてしまう動物の表象と違って、人間の表象の特徴は、「連続的な動作を導くのにふさわしいような表象ではなく、推論において互いに自由に作用し合う表象である」(p302)。この「自由に作用し合う表象」の代表が、「・・・でない」「not」「nicht」「ne pas」などの否定辞である。ある文章に否定辞を付加するだけで、我々の視界は一挙に広がる。「AはBである」という肯定判断が、我々の視線を一つのものに固定するのに対して、否定判断は、我々の視線をそこから解放し、転換させる。それは、「AはBである」という判断を受容しようと待機している「今、ここ」の認識風景を打ち壊し、可能な複数の領域からなる広い視界に自分を連れ出す。

このことは、動物の生きるアフォーダンス空間と対比すると、よく分かる。動物は、個別の知覚が行動指令するので、「一般的な認識」を媒介する必要がなく、実践に無関係な「事実の記述」という「遊んでいる表象」をせせと蓄えたりほしくない(p299)。ところが、人間の持つ膨大な表象は、大部分が「遊んでいる」。眼前の光景は、一義的な行動指令を発令せず、「中立な事実」として我々の前に横たわっている。もっとも端的な所与である眼前の知覚という表象でさえ、行動を指令しないという意味では「遊んでいる」。しかし、そのことによって人間は、「今、ここ」の現実を、きわめて多様な可能性のうちの一つとして捉えることができる。そうであればこそ、中立の事実から何らかの行動の方向を見出すためには、眼前の現実を、多様な可能な文脈の中に置いてみる必要がある。だからこそ、否定判断によって、「今、ここ」の外部に可能的な視点を移すことが不可欠なのである。そもそも眼前の「一つの物体」を one of them として理解することは、すでに一般性に媒介された把握である。それは、眼前の現実を一つの偶然として捉えることであり、それを異なる文脈の中に置いてみることによって、眼前の現実が異なる意味を帯びることを可能にする。そこに人間の自由の大きな部分があると言えるだろう。いずれにせよ、つねに「今、ここ」という環境知覚に生きている人間が、視点を外部に移すためには否定判断が絶対に必要である。否定判断によって我々は、「今、ここ」の空間の外部に視点を移すのだから、「空間の外部にある時間」の意識に到達するためには、否定判断が不可欠なのである。

さて、以上のようなミリカンの考察において、一つ見落とされていることがある。それは、線形時間は、運動を完全に捨象した、座標軸になってしまうという問題である。線形時間はたしかに空間の外部にある。列車のダイヤグラムや相対論のミンコフスキー座標などから分かるように、時間を直線で表示すれば、時間は座標軸の一つになる。すると運動は、その座標の中に書き込まれた一本の線、すなわち世界線で表されることになる。我々はしばしば思い違いをしているが、時計の針の動きは時間の流れを示すものではない。時計はこの世界の中に存在する運動の一つにすぎないのであり、アリストテレス的な「運動の数」としての時間は、それ自身は「量」であって流れない。量としての時間、線形時間が、座標軸になるということは、時間は一種の「形式」あるいは「入れ物」のようなものになり、中身はなくてもかまわない、つまり、その中に運動があるかないかは偶然的なものになる。

ニュートン力学の時間が、このような時間の代表的なものであるが、この時間の大きな欠点は、どこにも「今」がないことである。我々は、動物のアフォーダンス空間から出発して、進化した人間においては、空間の外部に出る視点としての線形時間が成立したことを見た。しかしながら、自分が空間を移動しているときは、

空間と時間は完全に分離せず、空間の「あそこ」、あるいは次々と視野の中心に開けてくる「いまだ見えてこない光景」など、空間は時間と一体になっていた。また、空間を運動する物体を知覚する場合も、物体の次々に変る位置は、同時に、時間の過去や未来の位置でもあった。このように見ると、我々は、「今、ここ」から開けている世界の「時間を生きている」という在り方をしている。このような、一面ではアフォーダンス的な時空を生きながら、しかし眼前の世界を多様な可能的文脈において捉えているという点で、我々は、「空間の外部」としての線形時間の中にも生きている。この二面性が、人間にとっての時間様相であると考えられるのである。

4 人間に固有の時間様相

以上から以下のことが言えるだろう。

(1) 原始記号の特徴は、記号自身が時空に嵌め込まれており、それらの記号に向き合っている私自身も一緒に時空に嵌め込まれていることにある(それと対照的なのが、絵や写真などの「記号の記号」(p72))。絵や写真の内部の時空と、絵や写真を手にして私の時空とは間が切れている。私は絵や写真に描かれたものと一緒の時空に嵌め込まれていない。これが、「私」と「私に開かれる時空世界」の根源的な個性である。この個性は、我々が文脈自由な高度な言語を駆使するようになった後も、「私」「今」「ここ」という形で、経験の基幹であり続ける。

(2) 知覚、想起、予期などはすべて、記号的経験である。原始的自然記号から人工的な文脈自由な記号(人間の言語)まで、レベルの違う記号群が重層的に積み重なる中を生きていることが、我々の時間経験の骨格を作っている。空間から線形時間が分離しても、アフォーダンス空間の時間との融合から抜け出すことはできない。マクタガートのように、時間の本性はA系列なのかB系列なのかと問うことは、正しい問いの立て方ではない。線形時間も、過去や未来という時間様相も、ともにアフォーダンス空間からの時間の分離という共通点を持っている。線形時間と時間様相を対立的に考えるべきではない。

(3) 想起や予期は、絵や写真がそうであるように、「記号の記号」である。眼前に開ける光景とそれを見ている私が、時空に嵌め込まれた記号であるのに対して、想起や予期の光景は、それと時空的に切れた不連続性を特徴とする。「今、ここ」のアフォーダンス空間の外部に出ることは、それ自身が記号的な表象作用によるもので、「今、ここ」の個性を欠いているがゆえに、想起や予期の光景は、絵や写真と同様に、一般性の側に一歩踏み出した表象である。絵や写真は、それがいつ、どこで、誰の、何のといった情報(キャプション)が付加されなければ、一般的な情報にとどまる。美術館にある一枚の絵が、作者も、制作年代も、描かれた人物名も分からない場合、「男の肖像」といったキャプションが付いているのがそれである。

絵や写真は、いつ、どこで、誰を、何をといったキャプションがついて初めて個別情報を表す記号たりうる。自分のアルバムに張られた写真が何の写真であるかは、通常知っているので、キャプションは書かないとしても、記憶がキャプションの代理をしている。ここで重要なことは、このキャプションの部分が、絵や写真を手にする私、すなわち「今、ここ」に嵌め込まれた私(=根源的個性)との時空的追跡関係を表現しており、それ自身は一般的情報(表象)でしかない絵や写真を、同時に個別情報たらしめている。つまり、書かれざる記憶としてのキャプションによって、絵や写真は「私」の根源的個性にコミットし、それによって、それ自体は一般的情報である絵や写真が個別情報に変容するのである。

想起や予期は、時空的に不連続という点で絵や写真と似ているが、違う点もある。それは、キャプションが付いていない絵や写真は存在するが、キャプションの付いていない想起や予期は存在しないことである。想起や予期は、何だか分からない光景や誰とも知れぬ人の姿が心の中に現れるのではない。「昨夏行った、江ノ島」とか「昨日のA氏の暗い表情」のようなキャプションがまず先行して想起が可能になる。予期もまた、

「1 時間後に、駅の改札で待ち合わせ」「4 年後のオリンピック開会式」のように、キャプションがなければ不可能である。つまり想起や予期は、最初から「今、ここ」の時空と関連付けられており、それによって個体情報化されている。それに対して、「一匹の犬」「大きな船」のように、時空を指定するキャプションなしに対象を「想像する」こともできる。これは想起や予期ではない。おそらく、想起や予期と「想像」との違いは、個体情報であるか否かにあるのではないか。「想像」は、私のいる「今、ここ」の時空と一切関係ないままで可能であり、時空的追跡可能性を持たず、文脈自由な言語の表象性に近い。

未来については個体指示ができないから、未来は本当は存在しないという見解(たとえば野矢茂樹氏)があるが、未来に関わる本当の個性性というのは、未来に生まれてくる物体の個性性ではなく、「今、ここ」にいる私という根源的個性性が、未来の時空の特定の位置領域への関係付けを可能にするという点が重要ではないのだろうか。つまり、個性性とは、「何かあるものが、今ここにいる私と時空的関係にあること」と定義されることになる。

(4) このように考えると、過去や未来の微妙な存在性格に光を当てることができる。たとえば、想起と予期には非対称性がある。まず、未来を考えてみると、未来には、時間を特定する未来もあれば、そうでない未来もある。「1 時間後に、駅の改札で待ち合わせ」「4 年後のオリンピック開会式」のような場合は、線形時間によって未来の時空の位置指定が行われている。しかし、「いつかするかもしれない、私の結婚」「もし、東京に大地震が来たら」のように、不特定の未来を予期する場合は、未来の時空の位置指定は行われないので、厳密には個体情報とはいえない。

それに対して、過去は、不特定の過去を想起するというのではない。「いつというわけではないが、・・・」という不特定の過去キャプションによって、想起を開始することはできない。それが可能な絵や写真との違いである。もちろん、「正確な時期は忘れたが、かなり昔」というような漠然としたキャプションの場合もありうるが、それは想起の時点で正確に言えないということで、原理的に補正可能である。しかし未来の場合は、「いつ起きるか分からない」というのは、予期が不備なのではなく、未来そのものに固有の性格といえる。

(5) 我々が表象する未来には、線形時間による時空指定が曖昧なのはなぜだろうか。それを考えるためには、「座標軸」としての線形時間の「見かけの形式性」を検討しなければならない。たとえば我々は、過去については、出来事は確定していると考えている。この場合、出来事とはいわゆる「歴史」の対象となる地球上の出来事、つまり、地球上で生活する人間に関わる出来事である。本来ならば、地球が太陽の周りを公転し、ある時刻に一定の位置に来ることも出来事なのだが、そのような天文学的出来事は、「歴史」には数えられていない。10 年前とか、西暦何年何月何日という「日付」は、歴史の中身ではなく、歴史をそこに書き込む座標軸、つまり白紙に目盛だけが打たれた「形式」のように考えられている。そして、地球上の様々な出来事が白紙に書き込まれれば、それが「形式」を埋める「内容」になる。「日付」や「時点」の「見かけの自立性」こそ、時間の大きい秘密なのである。

実際には、線形時間を形成する「日付」や「時点」は、実は天文学的出来事なのだが、それがあたかも出来事ではなく「形式」のように機能することが、未来の「地上の人間的出来事」を自由に表象できる理由である。未来を考えると、我々は「100 年後」や「明日」のような「時点」を自明なものと考えて疑わない。手帳の予定表やカレンダーのように、書き込みを待っている目盛付きの白紙のような「形式」が、未来に伸びている線形時間である。これによって、未来は、「形式」は決まっているが、「内容」は決まっていないもののように表象される。とはいえ、それには十分な理由もあるのである。というのも、地球が太陽の周りを公転し、一日の周期で自転することは、少なくとも数十億年以上の由来があり、これからも同様だと考えられるからである。この天文学的スケールは、人類の歴史や「私の人生」といったスケールをはるかに凌駕しており、そもそも人間の生活が地球上に存在するための大前提だからこそ、未来の「内容」に優先する「形式」としての線形時間は、ごく自然なものとして受容される。アリストテレスが天体の運行を永遠の事柄と見なしたように、これは未来に対する我々の基本的な態度を形成する枠組みなのである。

(6) 線形時間は、「時間の空間化」(ベルクソン)、「非本来的時間性、水平化された時間」(ハイデガー)などとして、批判的に論じられることが多いが、「日付」や「時点」の「見かけの自立性」は、原始の自然記号における反復という観点から理解することができる。そもそも、自然記号の反復は、原始の自然記号が「時空に嵌め込まれている」がゆえに可能なものであった。空間の「同じ場所」という規定がなければ、そもそも「繰り返し」ということがなく、「繰り返し」がなければ、「AがBを表象する」という表象関係が立ち現れることもない。また、一定の場所に住み着いて動き回るのでなければ、「同一の物体」に繰り返し出合い、それを「同一の物体」と同定することもない。自分の周囲に知覚されるものが、すべて記号になり、自分以外のものを表象(表現)することが、幾何学的空間や線形時間を生み出すのである。

自分の机を見ながらゆっくり周囲を回れば、机の見える姿は徐々に、しかも一定の規則的な仕方に変化する。パースペクティブ全体が移動することによって、知覚される光景が記号としての表現力を持つようになる。そして、「今ここ」のどのパースペクティブもそれ自身が記号になって、その外部を無限に表現し続ける。つまり、根源的表象としての時間・空間融合体は、ある限界に閉じ込められるということがない。「空間の果て」や「時間の始まり」を考えることが矛盾をきたすのは、「今ここ」のパースペクティブが、それ自身が記号になって、つねに「その向こう」という遠方を無限に指示し続けるからである。線形時間は、このように記号が無限にその外部を指示し続けるところに成立する。線形時間におけるある特定の位置、すなわち「時点」は、つねにその先の「別の時点」を指示し続ける。というのも、その「時点」自身が記号だからである。これが、「日付」や「時点」に「見かけの自立性」を与え、時間や空間を「内容」に先立つ「形式」たらしめる理由である。線形時間とは、我々にとっての自然そのものが底の底まで記号化されていることの、別の表現なのである。

註

(1) ミリカン『意味と目的の世界』信原幸弘訳、勁草書房、2007年

なお、本書については、筆者のブログで6月3日～7月3日まで11回に渡って解題した。本発表はその一部を利用している。(ブログ名：「charisの美学日誌」)

(2) 「この私」の根源的個性は、実は難しい問題を孕んでいる。というのは、バクテリアさえも表象活動をするというミリカンの自然記号論にとって、ミツバチのダンスやカワウソの水面叩き(敵の接近を知らせる)など、動物もまた広範な表象・記号活動をする。だが、バクテリアやミツバチやカワウソは、もちろん「この私」という意識をもっていない。動物たちの表象活動は、個性性と一般性が分離していない。人間において初めて、個性性と一般性を分離して理解することができる。だから、「この私」のパースペクティブという根源的個性性に依存するものとして、「局地的反復的自然記号」を捉えることは、あくまで人間の視点から原始の記号活動へと何億年も遡及する、雄大な反省的物語なのである。